

中村哲医師からの応援メッセージ



誰もが押し寄せる所なら誰かが行く。
誰も行かない所でこそ、我々は必要とされる。



状況報告



カマ第二取水口
日本の堰板方式水門を参考にした。
洪水や渇水でも一定しての取水が可能となった。



百の
診療所より
一本の
用水路を！

【略歴】

ベシャワール会現地代表:PMS(ピース・ジャパン・メディカル・サービス)総院長。
1946年福岡県生まれ。九州大学医学部卒業。国内の病院勤務を経て、1984年パキスタン北西辺境州(現:カイバル・パクトウンクワ州)の州都ベシャワールのミッション病院ハンセン病棟に赴任しパキスタン人やアフガン難民のハンセン病治療を始める。
その傍ら難民キャンプでアフガン難民の一般診療に携わる。1989年よりアフガニスタン国内へ活動を拡げ、山岳部医療過疎地でハンセン病や結核など貧困層に多い疾患の診療を開始。2000年からは早魃が厳しくなるアフガニスタンで飲料水・灌漑用井戸事業を始め、2003年から農村復興のため大がかりな水利事業に携わり現在に至る。
専門=神経内科(現地では内科・外科もこなす)

どぼく未来フォーラムへのメッセージ

「いのちを守る土木の未来」というテーマでフォーラムが開催されるとお聞きしました。小生は土木専門家ではなく、一介の医師に過ぎません。しかし、現地アフガニスタンの水利施設建設をライフワークとする者として、このテーマの切実さを理解しているつもりです。

私たちPMS(平和医療団・日本)は、医療団体ではありますが、2000年夏以来、現地で顕在化した大干ばつに遭遇し、「100の診療所より一本の用水路」を合言葉に、水利事業を精力的に進めてきました。大きく報道されませんでしたでしたが、政治や戦争の報道の陰に隠れ、アフガン農村の惨状は目を覆うものがあったのです。

当時WHO(世界保健機関)は500万人が飢餓線上、100万人が餓死線上と、警鐘を鳴らしましたが、政治上の理由から大きく取り上げられませんでした。実は2000万人と言われるアフガン国民の大半が自給自足の農民であり、かつては100%近い食料自給率を誇っていました。乾燥化の過程は現在もなお進行しており、最近では自給率が60%以下と報告されています。

これは恐るべき事態で、その割合だけ農民たちの生存する空間が失われたこととなります。診療所周辺でも次々と村々が消えていきました。当然、食糧不足で栄養失調になり、ささいな下痢症などの腸管感染症でたくさんの子供たちが命を落とすようになりました。この事態を前に医療は無効であり、薬で餓えや渇きを救うことはできません。そこで、日本側のベシャワール会と協力、組織上げて干ばつ対策を最大の活動とするに至りました。

この間にも政情混乱と外国軍の介入が続き、治安悪化が急速に拡大しました。それでも、干ばつでたたき出された農民たちが大都市にあふれ、混乱に拍車をかけている現実には伝わらなかったのです。少なくとも初めの頃、アフガン復興が話題になった時でさえ、大きな問題としては扱われなかったと思います。2002年、PMSは「緑の大地計画」を打ち上げ、東部アフガンの穀倉地帯の復活と沙漠化による廃村の防止を目指しました。

その最大の事業として25kmの用水路建設を8年がかりで行い、同水路流域3000ヘクタールの農地を回復、約15万人の帰農を促すに至りました。この経緯の中で、問題が全世界的に進行する温暖化にあることを知りました。即ち、巨大な貯水槽としての役割をはたしてきた高山の白雪が初夏に急激に解けて洪水を頻発させ、雪線の急速な上昇で渇水を引き起こしていたのです。これまで曲がりなりにも機能してきた取水技術が気候変化に追いつかなくなり、古い水路が涸れて農地を潤せなくなっていたのです。

取水技術の改良がアフガン農村の死命を制すると確信した私たちは、苦心の末日本で完成されていた水利技術を大幅に取り入れ、各地に安定灌漑を実現し、2012年現在、計14,000ヘクタールで60万人の農民の生活を保障するに至りました。

とくに心がけたのは、地元民が自力で保全できる水利施設でなければならぬということです。コンクリートを駆使した近代的な工法は、財政的にも技術的にも現地で不可能でした。近代工法が悪いというわけではありません。現地にあった適正技術という点で、江戸時代に完成した日本の伝統技術が優れており、私たちは大幅にこれを取り入れ、大きな恵みをもたらすことになりました。分けても重要な取水技術・斜め堰が大活躍をしました。恐らく日本の昔、飢饉と飢饉が日常であった時代、文字通り必死の努力で建設されたものに違いありません。

この事業を通じて知ったのは、日本の治水思想が自然を屈服しようと力ずくの工事をしなかったということです。それだけの物量や技術が投入できなかったといえはそれまでですが、数百年前に確立された治水・水利技術の底流を支えていたのは、「自然との同居」という考えです。彼らは自然に逆らわず、いのちを見据え、人為と自然の危うい接点を謙虚に見つめていたとしか思えません。

医学を含め、今日私たちに突きつけられている最大の課題は、「自然と人間の共存」だと思います。私たちは自然を操作し、人の意に合うよう努力してきました。そして、近代的技術が長足の進歩を遂げた今日、ややもすれば、科学技術が万能で、人間の至福を約束するかのような錯覚に陥りがちではなかったでしょうか。また自然を無限大に搾取できるという前提で生活を考え、謙虚さを失っていた事と無関係ですか。自然はそれ自身の理によって動き、人間同士の合意や決まり事と無関係です。

東北大震災を経た今、さらに市場経済の破たんが世界中でささやかれる今、いのちはただ単に経済効率や単純な技術進歩だけで守られないというのが、ささやかな確信です。この中で新たな模索が始まっています。その声は今でこそ小さくとも、やがては人類生存をかけた大きな潮流にならざるを得ないと思っています。

その意味で、貴会の掲げるテーマは大きな挑戦として、幾多のフロンティアを生み出してゆくと思っています。女性であればこそ、理屈ぬきにいのちの尊さを、利害を離れて直観できるものがあると思います。これがきっかけとなり、大小の工夫が生み出され、次世代への大きな力となってゆくことを願ってやみません。

今回のフォーラムの開催が意義多きものとなるよう、お祈り申し上げます。

平成24年6月
中村 哲